薬史レター

第67号

日本薬史学会　JSHP　2013年6月

日本薬史学会第６回柴田フォーラム開催ご案内

日本薬史学会第6回の柴田フォーラムを下記により開催いたします。高橋 文、米田該典の両先生による講演と朝比奈はるか先生の撮影した朝比奈泰彦先生（日本薬史学会初代会長）の貴重なホームムービーが上映されます。会員以外の方もお誘いの上奮ってご参加下さい。

日　時：2013年8月3日（土）
会　場：東京大学薬学系総合研究棟10F
大会議室
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
参加会費：無料
懇親会費：3,000円（当日お支払頂きます）

プログラム　受付開始　13：20　から

13：50 ～ 14：00
開会挨拶：相見則郎（日本薬史学会柴田フォーラム委員長）

14：00 ～ 15：10
座長　宮本法子（東京薬科大学教授）
⑴ 18世紀日瑞の医学薬学の架け橋になったツュンベリー
髙橋　文（日本薬史学会名誉会員）

15：10 ～ 15：20
休　憩

15：20 ～ 15：40
ホームムービー映写
祖父朝比奈泰彦とその家族
紹介者　朝比奈はるか（お茶の水女子大学生活環境センター研究員）

15：40 ～ 16：50
座長　指田　豊（東京薬科大学名誉教授）
⑵ 文化財の理化学調査の歩みと正倉院薬物の調査
米田該典（大阪大学大学院医学系研究科医学史料室）

17：00 ～ 18：30
懇親会　薬学図書館1階ロビー

参加申込・連絡先
折原　裕（東京大学大学院薬学系研究科）
TEL：03-5841-4758　FAX：03-5841-4758
E-Mail：oriharay@mol.f.u-tokyo.ac.jp

申込締切
会場設営などの関係上、2013年7月26日（金）までにお申し込みいただければありがたく存じます。

会場案内
フォーラム当日は土曜日のため建物内に自由に入ることができません。龍岡門からのバス通り側入り口よりお入りください。案内板に従い10階大会議室までお進みください。
http：//www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01_10_02_j.html

「薬史学雑誌」全巻全号電子アーカイブ化に伴う著作権委譲に関するお願い

2013年2月20日
薬史学雑誌編集委員会
委員長　西川　隆

薬史学雑誌著者各位

「薬史学雑誌」(以下「本誌」)は、第1巻第1号が1966(昭和41)年12月25日に創刊され、現在に至るまで日本薬史学会の学術誌として刊行されてきました。

本誌は、薬史学およびこれらと関連する各種分野の研究の発展に大きく貢献し、この分野の日本の代表的雑誌の一つとして高く評価され、1980年よりMedlineにも収載されています。これまで本誌に総説、原報、史伝等(以下「論文等」)を掲載させていただいた多くの著者様、本誌を支えて下さった会員、読者の皆様に深い感謝と敬意を表します。

近時、当編集委員会に対し、本誌を電子アーカイブ化することによって、是非、閲覧および検索を容易にしてほしいとの要望が国内外から数多く寄せられています。

このため日本薬史学会常任理事会および同編集委員会では、本誌がさらに広く世界の学会に貢献できるよう、多くの人々に便宜を図るため、本誌の電子アーカイブ化を実施することといたしました。

本誌の電子アーカイブ化にあたっては、著作権法により、本誌に掲載された論文等の著者から当該論文等の著作権(翻訳権「著作権法27条」および二次著作物利用権「同法28条」を含む。以下同じ)を譲渡していただくことが必要となります。

ただし、1991(平成3)年6月に発行された第26巻第1号以降に掲載しました論文等については、本誌投稿規定(第2項)による著者との合意に基づき、その著作権はすでに日本薬史学会に譲渡されているのはご承知のとおりです。

しかしながら、1990(平成2)年12月に発行しました第25巻第2号以前に掲載した論文等の著作権については、著作権の譲渡の有無が明確ではありませんでした。

そこで、本誌の電子アーカイブ化を実施するにあたり、1966(昭和41)年12月に発行の本誌第1巻第1号から1990(平成2)年12月に発行した第25巻第2号までに掲載しました論文等の著作権を、日本薬史学会に譲渡することを確認させていただきたく、著者の皆様にお願いいたします。

論文等の著作権の譲渡にご了承いただけない場合は、お手数ですが、その旨を2013(平成25)年12月31日までに事務局宛書面または電子メールにてご連絡いただけますようお願いいたします。なお、ご連絡がない場合には、著作権の委譲についてご了承いただいたものとさせていただきますので、あわせてお願い申し上げます。

なお、1991(平成3)年発行の第26巻第1号以後の号につきましては現在、pdf化を進めており、今年度中に学会webに収載予定です。

事務局連絡先：
〒113-0032　東京都文京区弥生2-4-16
㈶学会誌刊行センター内
日本薬史学会事務局

tel　：03-3817-5830
e-mail：yaku-shi@capj.or.jp

日本薬史学会2013年会（札幌）のご案内

年会長　吉沢逸雄（北海道支部 支部長代行）

日本薬史学会2013年会を北海道札幌市において盛秋の10月に下記の要領で開催します。特別講演は北海道医療大学学長の新川詔夫先生が行います。札幌のベスト・シーズンですので会員の皆様のご参加をお待ちしております。

【開催期日】2013年10月5日（土）

【会場】北海道医療大学サテライトキャンパス
アスティ45　12階
JR「札幌駅」南口、地下鉄「さっぽろ駅」から徒歩3分、札幌市北4条西5丁目（次頁の会場周辺地図をご参照下さい）

【主催】日本薬史学会

【後援】北海道薬剤師会、北海道医師会

【年会事務局】北海道薬科大学薬理学分野
住　所：〒047-0264小樽市桂岡町7-1
電　話：0134-62-1824（直通）
Fax　：0134-62-5161
メール：komatsu@hokuyakudai.ac.jp

【年会長】吉沢逸雄（北海道支部支部長代行）

【年会実行委員長】関川 彬（同支部常任幹事）

【年会事務局】小松健一（同支部常任幹事）

【懇親会】

年会終了後、会場から徒歩数分の地にある「京王プラザホテル札幌」（札幌市中央区北5条西7丁目）へ移動します。

【研究発表演題の募集】

発表はすべて口頭、時間は1演題20分を予定しておりますが、演題数によって多少の変更があります。

【発表演題の申込み】

発表者は発表申込みの時点で当会の会員に限ります。メールによる申込みはファイル添付形式ではなく、メールの本文で行い、以下の事項を記入の上、年会事務局（小松健一）宛て送って下さい。

①研究発表演題、②発表者並びに共同研究者全員の氏名（発表者に○）と所属
③連絡者の氏名
④所属　⑤住所　⑥電話番号　⑦Fax番号
⑧メール（勤務先の場合は所属を明記）
メールの件名は「演題申込み」とお書き下さい。

発表演題の締切りは、2013年7月1日（月）です。

【講演要旨の作成】

A4用紙を用い、余白は上下左右30 mm、表題はMS明朝15ポイント、発表者の氏名・所属は12ポイント、本文は10.5ポイントで、文章は必ず枠内に収めて下さい。

【講演要旨の提出】

演題要旨と共に以下の事項を記入のうえ年会事務局宛て送って下さい。

①氏名（ふり仮名）
②日本薬史学会会員・非会員・学生
③所属　④住所　⑤電話番号　⑥Fax番号
⑦メール（勤務先の場合は所属を明記）
⑧懇親会参加の是非
⑨合計金額

講演要旨は、2013年8月24日（土）までに年会事務局に送って下さい。

参加費は当日受付にてお支払下さい。

【参加費】

①年会：会員（4,000円、当日参加5,000円）、非会員（6,000円）、学生（1,000円）
②懇親会：会員・非会員（5,000円）、学生（1,000円）

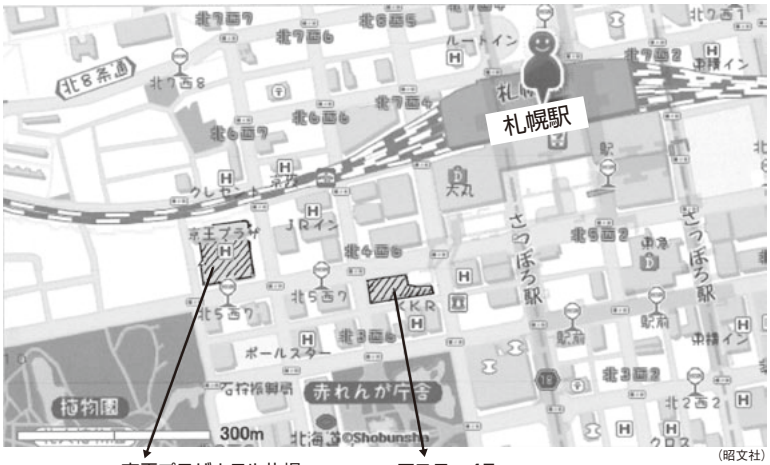
【当日の昼食について】

学会会場の周辺及び地下街には飲食店が多数あってご利用できます。

【謝辞】

津谷喜一郎先生の手引き（本誌第63号）を使わせて頂きました。御礼申し上げます。

会場だより JR札幌駅周辺の地図



薬史学会会員が第133回日本薬学会（横浜）で発表

2013年3月27～30日に横浜市で開かれた第133回日本薬学会において日本薬史学会会員が30日、次の演題を発表した。

1. ドライ系薬学領域の学会誌からみるディシプリンの動向と課題：寺岡章雄　津谷喜一郎（東大院・薬）/（薬学教育他：薬学教育Ⅲ　G-145 poster）
2. 「乳鉢」の語源を示唆する中国古典籍：五位野政彦（東京海道病院・薬）/（薬学教育他：薬学教育Ⅲ　G-146 poster）
3. 薬剤師の職業変化の社会科学的考察：赤木佳寿子（一橋大院・社会）/（環境・衛生系薬学：社会薬学30T-pm10 oral）

2013年度日本薬史学会総会開催
― 奥田氏と高橋氏に学会学術賞・柳澤氏に奨励賞授与 ―

編集委員　荒木二夫・西川　隆

2013年度の日本薬史学会総会は、4月20日（土）午後2時より東京大学薬学系総合研究棟2階講堂において、総務委員・柳澤波香評議員の司会で開会。議長には津谷喜一郎会長が選出され、冒頭、議長の呼び掛けにより2012年度に亡くなられた本学会の石坂哲夫（理事）、小倉 豊（理事）の両氏に参加者全員が黙祷を捧げ、議事に入った。議事録署名人には播磨章一理事、伊藤美千穂評議員が指名された。

議題として、まず2012年度の事業報告、決算報告、監査報告および2013年度の新役員人事などの審議が行われ、いずれも承認された。

事業報告では、①「学会慶弔規程」（2012年7月26日付）の作成、②かねてから広報委員会（委員長・折原 裕常任理事）が検討してきた「日本薬史学会ホームページ」が外部業者を導入して2012年12月28日に全面リニューアルされたことなどが報告された。新ホームページは、薬史学会の紹介、イベント・出版物案内に加えて、入会案内、関連リンク集が設置された。会員の皆様には是非一度アクセスして見て戴きたいと思う。

2013年度の役員人事では、財務・会員管理委員会委員長が高橋 文氏から田引勢郎氏に、また企画

委員会委員長が小川通孝氏から平林敏彦氏に交代し、両新委員長が常任理事に選任され、新任の挨拶があった。新理事には赤田幸雄、小川通孝、笹栗俊之、高田昌彦の4氏の就任が承認され、また新評議員には小松かつ子、正山征洋、鈴木達彦、野々垣恒正、八木澤守正の5氏の選任が報告された。

引き続き2013年度の事業計画案、予算案の審議に入り、事業計画では①「2013年会」が10月5日に札幌市アスティ45で、②「柴田フォーラム」が8月3日に東京大学で、③「五史学会」が12月に順天堂大学で開催予定であること、④「薬史学雑誌」が6月・12月の2回、「薬史レター」が6月・9月・12月・3月の4回、発行予定であること、薬史学雑誌と薬史レターの全ページが学会のホームページに掲載されること、⑤「日本薬史学会60周年記念特集号」として「わが国の医薬品産業史―現代史（続）」（仮題）が2014年刊行予定であること――などが報告、承認された。2013年度予算案は、総額6578千円とする原案が可決、承認された。

次いで薬史学会中部支部設立および支部長人事について審議が行われ承認された。東海支部を中部支部（東海・北陸・信越）と拡大し、新支部長に河村典久氏（理事）が選ばれた。

次に新名誉会員として永年にわたり前常任理事として財務・会員管理委員会委員長を務め、本学会の発展に尽くされた高橋 文氏が推戴・承認され、津谷会長から推戴状が贈られた。

引き続き日本薬史学会学術賞贈呈式が行われ、「薬史学会賞」は奥田 潤氏（受賞題目：薬師如来像とその薬壷の史的研究）および高橋 文氏（受賞題目：18世紀日瑞の医学薬学の架け橋になったツュンベリーに関する研究）に、また薬史学会奨励賞は柳澤波香氏（受賞題目：アポセカリを中心とする英国医薬史の研究）に贈られ、津谷会長から賞状と副賞が贈呈され、3氏から挨拶が行われた。

最後に報告・連絡事項として、①日本薬史学会2013年会（札幌）の開催案内について吉沢逸雄年会長および関川 彬年会実行委員長から説明が行われた。②支部報告では北海道（吉沢逸雄支部長代行）中部（川村典久支部長）、関西（村岡 脩支部長）から活動状況が報告され、総会は盛会裏に閉会となった。

なお総会に先立って開催された理事・評議員会では、総会に上程される案件の審議が行われたほか、出席者全員から最近の活動状況や抱負が述べられた。そのなかで津谷会長からは本学会の会員人口ピラミッドが提示され、男性会員の平均年齢が65歳であり、そのピークは60～64歳と75～79歳の2峰性で高齢化が進んでいることから、その対策として薬学生の加入勧誘に加えて、歴史好きの文系学生にも門戸を開放して若返りを図ることが必要であると述べ、議論が行われた。

日程の最後を飾る恒例の懇親会は、18時30分から東京大学・山上会館に賑やかに開催され、全日程を終えた。

2013年度公開講演会で能﨑、酒井両氏が講演

編集委員　荒木二夫

日本薬史学会の2013年度公開講演会は、総会終了に引き続き、東大薬学系総合研究棟の同じ会場で開催され、講演は2題が行われました。

講演1は、能﨑章輔氏（元化粧品工業連合会広報委員長）が「化粧品の歴史―衛生からQOLへ―」と題して行った。

テーマは、明治の文明開化から現代までの化粧品の歴史で、その前段として江戸期以前の化粧についても触れ、古代の日本人は身体や顔を赤く彩色したり、刺青をしていたと「魏志倭人伝」に記されていることや、仏教伝来とともに大陸の白に彩色する化粧が移入され、その後の日本人の化粧の基本になったことなどが解説された。

また明治期の国策は化学振興にあり、育成産業には化粧品と香料が含まれ、その頃の最先端技術の成果が化粧品であったという。現代では紫外線による擬似老化の防御までと化粧品の守備範囲が拡大され、医薬品と同じ薬事法の規制を受けるようになったと述べた。

講演2は、酒井シズ先生（日本医史学会理事長）が「江戸時代の養生訓」について講演した。平安末期に丹波康頼が記した「医心方」は中国の古典医書を基にしており、王侯貴族を対象とした養生書であった。

江戸時代の養生書は、慶長4（1599）年に曲直瀬玄朔が著した「延寿撮要」が先駆けだが、本格的なものは貝原益軒が84歳のとき、正徳3（1713）年に自身が体感したことを含め、誰もが読めるように和文で刊行された「養生訓」が有名である。

この「養生訓」は現代にまで続くロングセラーとなり、その後に書かれた養生関係書はおおむね本書がベースとなっている。江戸時代を通して庶民に広く読まれた「養生訓」の内容が、現代の日本人の健康観の原点となっていると語った。

講演内容は、論文として「薬史学会誌」に掲載されるが、以下に編集委員による聴講記録を記す。

能﨑章輔氏の「化粧品の歴史―衛生からQOLへ」を聴講して

編集委員　砂金信義

座長（松本和男理事）から、演者能﨑章輔氏は東京薬大を1960年に卒業後、永年にわたり化粧品業界で活躍され、化粧品工業連合会広報委員の要職を務められ、化粧品の歴史について造詣が深い旨紹介された。

講演1は、「化粧品の歴史―衛生からQOLへ―」と題し、古代日本人の色彩感覚を表すスライドが映し出されて講演は始まり、日本における化粧の文化史が語られた。

能﨑章輔氏

日本における化粧の歴史は「赤色」で始まる。日本書紀や古事記などに赤色顔料を顔に塗る風習があったことが記載されており、魏志倭人伝にも日本人の「鯨面文身」が記録されている。中国文化の到来により、化粧は「赤化粧」から鉛白粉を用いた「白化粧」へと変化する。化粧は「ホモ・ルーデンス（遊

ぶ人)」の側面をもっており、枕草子の一節に「心ときめきするもの、頭洗ひ、化粧じて香にそめたる衣きたること」とある。化粧は女性だけのものではなく、男子もする化粧は在原業平像に見ることができる。

江戸時代には、「赤(口紅、爪紅)」「白(白粉)」、「黒(お歯黒、眉作り」の3色が中心となり、江戸末期までの化粧事情は「都風俗化粧伝」にまとめられている。明治期に入ると、外来の化粧品も到来し、明治初期の滑稽本(西洋道中膝栗毛)に「逢うでころりやしゃぼんの水」と書かれている。この頃になると化粧に「衛生」の側面が付加され、石けんや歯磨き粉等が登場する。機能をもつ化粧品として「レートクレーム」が発売され、化粧品の機能が検討されるようになる。

そして明治期の化学振興の国策の基に、化粧品業界は発展し、明治・大正時代の博覧会に、東京小間物化粧品卸商同業組合がパビリオンを出展するほどまでになった。一方、白粉に用いた鉛白が授乳を通して乳児に脳膜炎を惹起する毒性が問題となり、化粧成分の規制が行われるようになった。

昭和期に入り、化粧品の公害が問題となり、いわゆる「大阪訴訟」で化粧品業界の責任が追及された。そんな中で「化粧品無用論」、「界面活性剤排除論」が叫ばれ、これらが契機となり薬事法で化粧品が定義され、化粧品の成分表示が義務づけられた。

皮膚科医師、薬学者、化粧業界が中心となって香粧品学会が組織され、化粧品の機能性が研究されている。彩色化粧からスタートした化粧品は、紫外線による老化の防止など「くすり」に隣り合った存在となっている。化粧品は「Physical」、「Mental」、「Social」の要素をもち、末期癌患者のために「Look Good, Feel Better」のキャンペーンが行われるなど、「Beauty」を通して QOL の向上に寄与している。

化粧は「非言語コミュニケーション」として捉えることができ、個人の選択の自由がある。そして今、「人目をはばかることなく車内で化粧する人たち」が見られることも指摘された。

現代の色彩を示すスライドで講演を終了した。

酒井シズ先生の「江戸時代の養生訓」を聴いて

編集委員　小清水敏昌

公開講演2「江戸時代の養生訓」が始まったのは午後5時過ぎからであった。演者は日本医史学会理事長の酒井シズ先生。この講演会の開始直前に行われた総会で名誉会員に推挙され、かつ日本薬史学会賞を授与されたばかりの高橋 文先生が演者の紹介をした。酒井シズ先生は医学史関係では知らない人は居ないほど著名である。三重大医学部を1960年に卒業、現在は順天堂大学名誉教授。

人の健康についての話になると、話に出されるのは貝原益軒の「養生訓」であろう。現代でも多くの人に知られている著書である。講演では、江戸時代に刊行された各種の「養生訓」について平易に解説し、いかに当時の庶民は身体や気持ちの持ち方などを大事にしていたかを話した。

酒井シズ先生

江戸時代に入る直前の1599年に、「延寿撮要」という養生訓的な書物を曲直瀬玄朔が著わした。中国の医学書を基にして纏めたもので、養生の三大基本として言行、飲食、房事に細かく分け健康を保持するための注意などを著した。

江戸中期の1713年、84歳の貝原益軒が出版した「養生訓」は、健康の大切さや維持するための方法などについて、自身の経験を加味しながら和文で易しく記述してあり教訓的な要素もある。そのため、庶民にとっても本書の内容が分かり易く説得力があったという。

演者はこの本の執筆の経緯やその内容などについて言及。本書が世に出る10年ほど前に益軒は「頤生輯要」(いせいしゅうよう)という名の養生に関する全5巻から成る書物を出している。しかし、この情報源は当時の中国の著名な聖人の言葉や古くからある医学書などから拾ったものであるため、内容も難しく漢文で著わしているので江戸の庶民はあまり手にしなかったという。

そこで、益軒は広く庶民に対して健康の大切さなどを訴えるために「養生訓」全8巻を著したという。冒頭で、益軒が述べている「人生観としては養生の術を学んでよくわが身を保つべし」とは、いわば健康こそが第一であることを訴えていると演者は解説した。すなわち、当時も健康の願望が強かったものの現代の健康の意味とは異なり、「養生訓」は己の価値観、死生観の上に如何に生きるかを説いたもので、晩年の幸せのために若いときから養生すべきと云っていると。幼弱だった益軒は自ら健康維持のために試行錯誤して得た経験を教訓として纏めたものである。

そこで、演者は本書で述べている益軒の考え方をキーワードにしてその意味を列挙し解説を加えた。その主なものについて記した。

倫理観：天地・天道に対して「畏れ」「慎み」「惜しむ」

生命感：人の命は我にあり、養生良くすればよし
養生せざれば短し
(人の命を長くするのも短くするのも養生しだい)

元気・病気：百病は皆 気より生じる、病とは気やむ也

自然治癒：薬のまずしておのづから癒ゆる病多し、薬を飲むこと慎むべし

食養生・飲食：ほどほどに

色　欲：内欲の抑制、徳を養い身をやしなう、その道の一なり

居室の在り方：南に向かい戸に近く明なるべし

択　医：医者を知ることは養生の道、医者には良医、俗医あり、上中下医がある

杉田玄白は江戸後期の医学者であり、オランダの解剖書を「解体新書」として翻訳したことで有名である。その杉田玄白も幼弱であったため自ら養生していたという。杉田は齢70のときに「養生不七可」という養生書を著し、飲と食とは度を課すべからず、事なきときは薬を服すべからず、などと健康に関する対処方法を纏めている。この書についても演者は解説した。

このように江戸時代の庶民たちが自分たちの健康維持についていろいろと考え実践し、多くの書物を参考にしていたことが窺える。その主なお手本になったのが貝原益軒の「養生訓」であり、江戸時代のベストセラーの一つという。

最後に演者は、現代の私たちは益軒が記述した内容を理解し、そこから取捨選択して自分の健康保持に用いれば良いのではないか、そんなに違和感がなく現代でも十分に通用する内容である。近代医学はややもすると投薬が中心になってしまうが、江戸の「養生訓」は現代も生きていると思う、と強調して1時間程の講演を終えた。医学・薬学の進歩により、徐々に各種の疾病が解明されつつあるが、心身ともに健康状態を維持する智慧を、今から300年前に発刊された「養生訓」から改めて得ても良いのかもしれないと思った。

―― お詫びと訂正 ――

薬史レター No.66の p.1に掲載された「第6回柴田フォーラム」の講演者・米田該典先生の所属が間違っていました。米田先生はじめ関係者の皆様にご迷惑をおかけしました。お詫びし訂正いたします。

(誤)：米田該典 (大阪大学総合学術博物館)

(正)：米田該典 (大阪大学大学院医学系研究科 医学史料室)

北海道支部だより

2013年度北海道支部報告

北海道支部の活動報告は以下の通りです。

● **第60回北海道薬学大会**（登録名：「薬史学会」）
5月18日～19日、札幌コンベンションセンター
総会：報告（事業、会計、監査）および計画（事業、会計、その他）
特別講演：講師　和田浩二　先生
（北海道薬科大学教授）
日本におけるトリカブト属植物の研究の歴史
―北海道産トリカブト属植物を中心に―
研究発表：薬史学会部門1演題

● **第8回合同学術集会**
10月26日、AKKビル
特別講演：講師　山口路子　先生
（しろいし薬局、札幌）

東海支部だより

2012年度・日本薬史学会・東海支部活動報告

日本薬史学会中部支部・東海地区長・河村典久

2012年度の東海支部活動報告は以下の通りです。

● **日本薬史学会・東海支部総会と第4回講演会**
日時と会場：2012年12月1日　13時
（名古屋駅前「名城大学名駅サテライト」）
総会：2013年度東海支部長として河村典久副支部長を承認
演者：越川次郎（中部大学）『名古屋の売薬について』
加藤宏明（伊勢くすり本舗）『伊勢参りと萬金丹』

● **日本薬史学会・東海支部総会と第5回例会講演会**
日時と会場：2013年3月17日15時　（名古屋駅前「名城大学名駅サテライト」）
総会：東海支部の中部支部への支部拡大を承認、河村副支部長の中部支部長への昇格を出席者全員が承認した。信州地区3名の会員の中部支部への加入の報告があった。
演者：飯田耕太郎（名城大学薬学部）『スイス薬学歴史博物館の社会的意義について』

● **日本薬史学会東海支部役員会（会場：名古屋駅前「名城大学名駅サテライト」）**
2012年6月10日　東海支部活性化討議（東海支部から中部支部設立について討議）
2012年10月6日　日本薬史学会会員（3支部・地方）の地区別会員数表と中部支部会則案の了承

● **その他**
2012年10月10日　日本薬史学会会員（3支部・地方）の地区別会員数表と中部支部会則案について、北陸地区・金沢大御影教授、富山大小松教授の御意見を聞く。後日、北陸地区の了承を得た。
2012年11月16日　3支部長・事務局長（北海道・東海・関西）会議（東京ガーデンパレス）に奥田、河村が出席。
2012年12月20日　奥田、御影、小松、河村の4者会議を行い中部支部設立について意見の一致を見た。また、信州地区3名の中部支部への加入について相談した。（金沢大学）

中部支部（東海・北陸・信越地区）を設立

日本薬史学会中部 支部長　河村典久

東海支部は、2013年4月20日の日本薬史学会総会において中部支部として発足することが承認されました。これまでの東海支部は、東海地区の会員を対象に活動してきましたが、新たに北陸、信越を含めることになり、河村東海支部長が中部支部長となることが承認されました。

中部支部は、従来の東海地区（愛知、岐阜、三重、静岡）と、北陸地区（富山、石川、福井）および信越地区（長野、新潟）を含めた広域にわたりますので、今後の中部支部からの通知・連絡については、経費削減のためできるだけメールによりたいと考えております。これらの地区に居住あるいは勤務されている会員の皆さんには中部支部への加入をお願いいたします。

中部支部事務局は、引き続き東海支部事務局の飯田先生にお願いしますので、メールアドレスなどを下記あてにお知らせいただければ幸いです。

日本薬史学会・中部支部事務局長　飯田耕太郎
名城大学薬学部　薬学教育開発センター
教育開発部門
〒468-8503　名古屋市天白区八事山150
TEL：052-839-2710（直通）

関西支部だより

第７回　日本薬史学会関西支部研修会報告

日本薬史学会関西支部　研修会世話人　宮崎啓一、多胡彰郎

2013年1月12日（土）、16時30分から「くすりの道修町資料館」（大阪市中央区道修町）で、第7回日本薬史学会関西支部研修会が開催されました。講師に大塚ホールディングス株式会社常勤監査役谷口正俊氏をお招きし、「抗結核薬イソニコチン酸ヒドラジッド開発の歴史―最新の抗結核薬開発の状況―」と題してご講演いただきました。

現在、発展途上国を中心にして3大感染症のひとつとして知られる「結核」は、全世界で有史以来人類が悩まされ、不治の病として恐れられてきた。

結核治療薬の開発の歴史は、19世紀中頃のアスピリン、インジゴおよびニトログリセリンなどの合成化学の勃興にかかわる近代化学に始まるといわれる。

史上合成殺菌剤はサルファ剤に始まる（1935年）といわれ、ペニシリンの発見（1940年）およびパラアミノサリチル酸（PAS）の開発（1943年）に続くストレプトマイシンの発見（1944年）を経て、結核の治療が可能になった。1951年、欧州とアメリカでイソニコチン酸ヒドラジッド（以下INAH）の抗結核作用は、ロシュ社のFox H. H.およびスクイブ社（現BMS社）のBernsteinらによって全く独立に多くのヒドラジン誘導体のスクリーニングにより発見された。研究の中心はINAHの誘導体に置かれたが、結果的にはINAH自体が最も優れた抗結核薬と結論付けられた。

戦前本邦においてINAHの合成原料であるヒドラジンの製造は、軍部より命令が下りた武田化学工業株式会社（現和光純薬工業株式会社）から、1943（昭和18）年暮れ、医薬用の無機塩類の取引があった大塚製薬工場にヒドラジンまたは硫酸ヒドラジンの生産が委託されたことに端を発した。1944（昭和19）年から硫酸ヒドラジンを生産して軍に納入したが、結局ロケット自体は日の目を見ることがなく終戦を迎えた。しかし、この軍命令で生産した経験があったことから医薬用に直ちに生産が可能となり、大塚化学株式会社（1950年、大塚製薬工場から原料部門分離して設立）で、INAHの合成原料であるヒドラジンの製造を開始した。

大塚製薬工場は徳島大学の指導を受けながら、INAHの医薬品化に成功し、大塚化学株式会社製のヒドラジンなどの原料から自社生産し、1952（昭和27）年、抗結核薬「ヒドラジッドオーツカ」を発売した。後にINAHの原体も生産し、大塚製薬工場に供給し、「ヒドラ」の名称で大塚製薬工場から医薬品として販売され、大塚製薬株式会社では今でも「ヒドラ」の名称でINAHを販売している。

本邦においても1951（昭和26）年から多くの論文が発表され、現在までにINAHに関する文献数は9500件の多数に達し、1953（昭和28）年以前でも240件を数える。当時は国際特許法が確立していない時代で、各国で一斉に生産、販売が行われた。その後、1957（昭和32）年に「カナマイシン」1966（昭和41）年には「リファンピシン」の発見・普及により結核の治療効果が向上し、さらに併用治療で治療効果の大幅改善と耐性菌の出現抑制から先進国では急激に結核患者は減少した。

結核治療薬の使用に先立ち、1942（昭和17）年からBCGの予防接種を開始、1948（昭和23）年から学童全員への予防接種が開始された。

後進国や発展途上国ではまだまだ多数の結核患者が存在し、一方先進国でも近年、再度患者増加の傾向にあり、多剤耐性菌の発現問題など、この40年間の新規抗結核薬の非開発問題がクローズアップされた。これには製薬会社の利益追求、発展途上国向けでは儲からないから新薬開発を行わないといった事情も原因と考えられる。また、疾患の治療において免疫抑制作用がある場合、結核などの感染症に患罹しやすいことも生じる。

結核の予防と治療のため、WHOやビルゲイツ財団、ODAなどが発展途上国への援助にあたっている。抗結核薬は2012年現在、世界で48の開発プロジェクトが進行中である。

そして講演の最後を次のように締めくくった。

アンメッド・メディカル・ニーズの対応がいわれているが、最先端医薬品、治療のみが高レベルのものであろうか。過去に多くの製品が開発され製薬会社が開発をしなくなった医薬品でもまだ全ての患者が満足しているわけではない。80点の医薬でもまだ20%の不満足がある。これら通り過ぎた医薬品の開発では競合相手がいない。先端の医薬品は超激戦区である。過去のブロックバスターといわれた医薬品の特許が切れると10%の売り上げに落ちる。しかしさらに良い薬を開発すると再度ブロックバスターになる可能性がある。

研修会には初参加、会員、非会員をあわせ18名にご参加いただきました（懇親会参加者計15名）。終了後、場所を交流会場に移し、引き続きINAH開発の歴史をめぐって活発な意見交換や、道修町の老舗塩野香料株式会社の塩野秀作社長のご参加もあり、道修町談義に華が咲きました。さらに昨年、当支部において取り組みを開始した華岡青洲の実弟鹿城が大阪に開設した分院「合水堂」の史跡建立計画をめぐっても、会員から話題が提供されました。

最後に谷口先生のご健康、また大塚グループのますますのご発展を祈念して、第7回日本薬史学会関西支部研修会および交流会は成功裏に閉会しました。

交流会場の谷口氏

交流会場の風景

石坂哲夫先生を偲ぶ

日本薬史学会名誉会員　山田光男

このたび上村啓子さまから、「父・石坂哲夫が本年1月11日に94歳で死去、家族だけで葬送しました」との知らせを頂いた。石坂哲夫先生（以下･先生）は、1954（昭和29）年の日本薬史学会（以下・当会）創立からの幹事役を担当され、当会の発展に大きく貢献された。ここに謹んでお悔やみ申しあげ、先生の業績を振り返りたい。（以下敬称略）

当会は1966（昭和41）年3月に機関誌「薬史学雑誌」を創刊したが、役員は、（会長）朝比奈泰彦、（幹事）赤須通美、石坂哲夫、木村雄四郎、清水藤太郎　根本曾代子、三浦三郎、三堀三郎、吉井千代田、（地方）木村康一、宗田一、高橋真太郎、塚本赴夫が掲げられ、先生は幹事として挙げられている。「薬史学雑誌」発行以前に清水藤太郎は、主宰する「薬局」（南山堂･月刊）に当会関係の報告を掲載したが、当会創立当時の記事中に、先生が参加者として、川瀬 清（現・名誉会員）とともに挙げられている。

先生の著書は、「くすりの歴史」日本評論社（1979）、「薬学の歴史」南山堂（1981）、および「やさしいくすりの歴史」南山堂（1994）がある。先生は富山県滑川市生れ（1918/大正7）、東京帝国大学医学部薬学科を卒業（1941/昭和16）して田辺製薬（株）東京研究所に勤務。応召・復員後に社団法人・日本薬学会事務局局長、常務理事を歴任（1950 ～ 1972・昭和25 ～ 47）。この間、1961（昭和35）年に共立薬科大学（現慶應義塾大学薬学部）の講師として薬史研究の道に入り、薬史研究関係の2題を初めて報告した。その後、1973~1994（昭和48 ～平成6）年の20年にわたり、共立薬科大学教授として、また、東邦大学薬学部、昭和大学薬学部、東京理科大学薬学部で、薬学史、薬学概論、新薬論を講義された。

先生は東邦大学勤務時代に医学部大森病院の薬剤部長を兼務され、現場薬剤師としても目覚ましい働きをされた。当時、病院を訪問して先生から薬史学研究への勧めを受けた私は大きな衝撃を受け、これを契機として本会に入会し、根本曾代子（日本の薬学）、石坂先生（薬学の歴史）に次いで日本薬局方に関連する報告で学位をいただくことなった。

当時、水野傳一教授（東京大学薬学部）は、薬史学研究の大きな発展を期待され、根本曾代子の学位審査を担当されていた。教授は「薬史学分野の研究に東大で学位授与の門戸を開いて研究のすそ野を広げたい」と言われていたが、石坂先生の激励の言葉とともに今でも脳裏に強く残っている。先生の著書「薬学の歴史」は、清水藤太郎の名著「日本薬学史」とともに薬学徒必読の書として、吉井千代田（元当会・会長代行）が当時の薬事日報に詳しい書評を寄せた。

先生は、定年を迎えて薬科大学での薬史学、薬史概論などの講義を終わられてから、その永年の研究成果を生かす仕事として、阿佐ヶ谷ファーマシー薬剤部長、薬学ゼミナール学長、医大予備校校長などを務められた。

当会では、先生の長年の薬史学研究の成果および当会運営に対してのご助言などに対して、名誉会員へのご就任をたびたびお願いしたが、先生は「私は終生、現役です」といわれて名誉会員就任を辞退され、最後まで現役の立場を続けられた。

先生の遺影は葬儀に用いたものを上村さまから頂きました。謹んで石坂哲夫先生のご冥福を祈ります。（本稿作成にご助言いただいた川瀬 清名誉会員に感謝します）。

〔Book紹介〕

船山信次　著

「毒の科学―毒と人間のかかわり」

B5版　239頁　1,600円（ナツメ社）

毒に関する科学と文化史は人々の共感を呼ぶせいで、多くの本が出版されているが、本会の評議員で日本薬科大学の船山教授が、今回、新たに題記の著書を出版された。

すでに毒についての著書を出版されているが、今回の本はすべてカラー図版で、日本をはじめ世界の毒の文化史に及び、豊富な化学構造式と図版による解説、さらに世界の科学者の人物写真を含めて記述されている。

第1章「毒と人間の歴史」第2章「毒を科学する」第3章「毒と人間の危険な関係」第4章「毒をもつ動物や植物」第5章「毒の有効利用」で構成されている。

また、各章にNote, TopicおよびColumnなどで解説されているのも親切である。

本書には多くの毒に関する警告ばかりでなく、有効利用についても解説され、動植物から水産物、化学と生物兵器、放射性物質まで、著者が宮城県での東北大震災の体験が反映されていると言えよう。

（山川浩司）

〔Book紹介〕

Deepak Kumar, Raj Sekhar Basu 編

Medical Encounters in British India

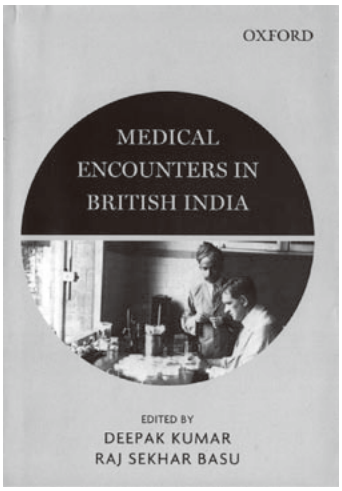
Oxford University Press　B5版　329頁　2013年刊　INR 875

編集者のDeepak Kumarは、Jawaharlal Nehru Universityにおいて歴史教育に携わり、特に英領インドにおける科学と社会の歴史に取り組んできた。他の11人の筆者の専門分野も、医学、教育、環境、政治生態学、資源問題、公衆衛生、伝染病、医療広告の歴史と幅広い。

序論では、古代インドの医学がどのようにイスラムやギリシアの医学に影響していったかが論じられている。そして8世紀の末にはギリシアの医学がペルシア語やアラビア語に訳され、そのテキストがインドへもたらされた結果、13世紀以降のアーユル・ヴェーダの医師たちは、アラビア医学（ユーナーニー）が用いた多くの薬物を治療の実践に取り入れたということを、医学交流史の例として挙げている。また、17世紀にオランダ、イギリス、フランスがインドへ進出して以来、アーユル・ヴェーダは西洋医学の影響を受けるようになる。さらに19世紀前半には、インド医学は西洋化の動きが高まる。

しかし独立運動とともに伝統医学は復興する。伝統医学派のインドの施療者たちは、実際には西洋医学を取り入れながらも、理論の面では、細菌学に基づく病因説と三体液質によるそれとを別個のものとして捉え、混合主義的な理解を示していたことが記されている。

本著は、英領インドの医学に視点をおきながら、19世紀までの東西医学と健康を世界的フレームで取り扱った稀少な著作である。巻末の参考文献は、現代インドの薬学史研究において有用性が高い。（夏目葉子）



薬史往来　私の薬学史研究

日本薬史学会理事　辰野美紀

「生命は情報である」これが1963年、18歳になったばかりで希望に溢れて千葉大学薬学部に入学した私が聞いた一般教養の生物学の最初の授業での教授の第1声であった。ワトソン、クリックは高校の授業の知識として知っていた。しかし、医学や薬学のなかで扱われる“生命”という概念にはもっと生き生きしたイメージを持っていた私は、大きなショックを受けた。

私が学ぼうとしている薬学とは何だろう？ 日本で唯一の理論として学校で教えられている近代科学とは、西欧でいつ、どのような契機で成立してきたものなのか？ 近代医学・薬学は、何を継承し、何を改変し、何を排除して成立したものなのか？この疑問は、ずっと私に付き纏ってきた。この私の中に生まれた疑問を私なりに解いていく作業こそ、自分が薬学を学ぶ者として、または、一人の人間として生きていくためにどうしても必要なことだったように思えた。

当時は、しばらくは試行錯誤が続いたが、宮木高明先生の薬学概論と吉岡信先生の薬学史の授業以来、不思議なことなのだが、私が薬学史研究に従事する方向に誘われるような偶然が重なりだして、ここまで来る事ができたように思う。

1966年8月、専門を終了し、あと卒論を残すばかりの私に、ドイツ・ミュンヒェン大学薬学部への留学が決まった。ミュンヒェンに着いて担任として紹介されたのは、中世修道院薬学史専攻のカリーニッヒ教授であり、上級生として声をかけてきてくれたのは、後に中国医・薬思想史の専門家としてミュンヒェン大学医学部医学史の教授になったウンシュルドさんであったのだ。さらに、1983年には、大阪大学衛生学研究室の中川米造教授の勧めで、マールブルク大学薬史学研究所のルドルフ・シュミッツ教授の下に留学することができた。

今でも、私の薬学史研究は、自分の人生を生きる意味を探求することに重なっていると言って良いかもしれない。

薬史レターへの投稿をお待ちしています

薬史に関するエピソードをはじめニュースやBook紹介などなど、会員からの投稿をお待ちしています。送り先は日本薬史学会事務局宛にお願いします。紹介の図書は表紙をスキャンなどしてお送り戴ければ有難いです。次号（第68号）は2013年9月発行予定（締め切りは7月末日）です。

日本薬史学会編集委員会

編集委員長：西川　隆

編 集 委 員：荒木 二夫　小清水敏昌　砂金 信義　ヨング・ジュリア

薬史レター 第67号 2013年6月

編集人：西川　隆　　発行人：津谷喜一郎

日本薬史学会　　The Japanese Society for History of Pharmacy（JSHP）

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 ㈶学会誌刊行センター内　日本薬史学会事務局

tel：03-3817-5821　fax：03-3817-5830　e-mail：yaku-shi@capj.or.jp　http://yakushi.umin.jp